

## 「ナガサキの哲学」を創出する人

中原澄子詩集『長崎を最後にせんば』に寄せて

この詩集は、長崎から海を隔てた天草で音と光を感じた十六歳の女学生が生涯をかけて長崎原爆の実相を明らかにするだけでなく、多くの人々に長崎原爆とは何であったのかを問い返してもらうために書かれた渾身の詩集である。

二〇〇七年五月、『原爆詩一八一人集』を編集している真っ最中に、北九州に暮らす中原澄子さんという詩人から参加したいという連絡があった。広島原爆の詩は多いが、長崎原爆の詩は参加が少ないこともあり、中原さんの低音でゆっくりと話される電話の声は印象に残った。中原さんは「一九四五年八月九日十一時二分・長崎」という五人の被爆者から取材した、長崎弁・天草弁などを使用した散文詩を寄せてくれた。五人が被爆した町名と爆心からの距離も記されてあった。長崎原爆を本格的に書いた詩人は、被爆した福田須磨子、山田かんの二人の詩人以外は、余り知られていない。最近では、千葉県在住の池山吉彬さんがこの数年で、家族の被爆を見詰めた二冊の長崎原爆についての芸術性の高い詩集（『精霊たちの夜』『都市の記憶』）を出した。広島原爆に隠れて長崎原爆は、正面から取り上げられることが少なかつたのではないか。『原

正確に被爆者からの証言を再現する方法では、ありのまますぎて焦点がぼやけて、未知の読者には届いていないのではないかという思いがあり、新たな表現方法を模索し始めていた。その発端がこの『原爆詩一八一人集』だつたのだ。中原さんは『原爆詩一八一人集』が刊行された後にこのアンソロジーが、朝日新聞の「天声人語」など五十紙以上の新聞に取り上げられて、詩を読まない人びとにも、広がりを持ち読まれていることに驚いたらしい。中原さんの友人たちにも評判はともよく、中原さんは友人知人の多くに日本語版・英語版を広めてくれている心強い同志になっていったのだ。

昨年の二〇〇七年十一月に東京の東洋大学白山キャンパスで開かれた『原爆詩一八一人集』出版記念会』にもはるばる北九州から参加してくれた。その前日に私は中原さんとお会いすることになり、長崎原爆をテーマにした新詩集の相談をされたのだつた。私は『原爆詩一八一人集』を編集しながら、なぜか刊行後にはきつとこの参加者の中から必ず本格的な原爆詩集を個人で書く詩人がでてくるはずだという確信じみた予感があった。その詩人が誰であるか、心ひそかに待ち望んでいた。中原さんからその相談をされた時に、私はその初めの詩人が中原さんであつたのかと、まじまじとお顔を眺めたことを思い出している。小柄な女性だが、強固な意志を持った例えば、石川逸子さんのような他者の苦悩を表現しうる詩人だと直観したのだつた。その日は中原さんの既刊詩集や

爆詩一八一人集』の編集上の心残りの一つは、長崎原爆の詩をもっと収録したかつたという思いがある。長崎の詩誌「子午線」の編集人である吉田美和子さんにはお願いをして、福田須磨子や「子午線」の元編集人だつた入江昭三や上瀧望観など物故者のご遺族を紹介してもらい、また現同人の方に参加を促していただいたりして多少の成果はあつた。また他の長崎の詩誌にも連絡をとつたが、親族が原爆の被災者なのでタブーになっていて、未だ書ける状態ではないという重たい返答もあつたのだ。その時には、「告発の広島」に対して、「祈りの長崎」と言われることの意味が少し垣間見えた気がした。

中原さんは直接の被爆者ではないが、学校の教師を辞めた後に被爆者からの取材を開始し、寄稿された散文詩の元になつた、聞き書き『天草に帰つた被爆者（正・続）』を二〇〇五年に刊行している。天草北端の富岡と長崎は海で三十kmほど離れているが、船だと二時間もかからないで着いてしまう。それゆえ熊本市よりも長崎が生活圈として近く、当時は天草の優秀な学生達は長崎医大などに入学をし、職場も三菱造船を始め、多くの三菱関係の軍需産業に従事していた。中原さんにとつて長崎で被爆した天草の人びとは、他人事ではありえないのだ。天草の被爆者の傷は我が肉体が被爆したと同じ痛みを感じながら、この無償の「聞き書き」集を実現されたのだと思われる。しかしこの二冊の本は、一般に、あまり読まれることはなかつたと聞いている。中原さんにとつてこの

エッセイ集などの編集上の率直な感想を伝え、私なら原爆詩集の精神である（ヒロシマの哲学）に基づいた本作りをさせてもらう旨を伝えた。大筋では原稿を二〇〇八年の春までに書き上げて、検討させてもらう。その原稿が出来たら二人で長崎で会い、原稿の打ち合わせを兼ねて長崎の被爆跡を見学、取材し、私は棠解説文を書く準備をし、八月九日の発行日として七月中には刊行することを話し合つた。その後、電話で多くの打ち合わせをしながらこの詩集が完成に向かつていった。中原さんは本格的な硬派で、粘り強い強靱な意志を持つた詩人だということがだんだんと分かつてきた。多くの生身の被爆者達の苦悩やその後の過酷な人生を聞き取つたことの実実をさらによりリアルにするために、詩作品に凝縮し、書き替えていく無償の試みに驚嘆していた。そして戦争や原爆への凄まじいばかりの怒りを秘めながら、その作業を行つていくのだと、電話口から洩れてくる思いに感銘を受けた。もちろん中原さんも人間なので時にはくじけそうになるが、その時に編集者として私の出来ることは、八月九日の被爆者達に取り憑いてでも書き切つて下さい、と心を鬼にしてただ励ますことだけだつた。そして四月下旬に二人が長崎で会う直前に、原稿はほぼ完成したのだつた。

原稿の多くは八月九日十一時二分にタイムスリップして私たちが被爆地に舞い降りさせる。そこには一瞬で街も人間も自然も剥ぎ取られて、たまたま運よく生き残つた人びとの見

た惨劇の光景が繰り広げられていく。その地獄で吐かれる言葉は、長崎弁であり天草弁でしかありえない。家族や友人や職場の同僚が人間の姿を無くして幽鬼のようになり、死んでいく姿を、中原さんは、今この場所で起こっているかのよう  
に再構成をしてリアリズム詩篇として記している。このような原爆詩集はかつて存在しなかったと私は考えている。これほど被爆者に寄り添いその現場に密着して書くことと志して実行した詩人は、私の知る限りでは、大崎二郎詩集『幻日記』

(二〇〇六年刊行)の広島原爆詩の連作二十五篇に次ぐものではないか。一瞬にして人間の形を変えられた人びとが苦しむ光景は、筆舌に尽くしがたいものだ。しかし、その困難な試みを中原さんは、聞いてしまった以上やるべきだと固い意志で実行した。いまやらなければ、被爆者の生の声は永遠に消えてしまうという切迫した思いがあつたに違いない。また動員先から五十km離れていたとはいえ、同時代に生きた者のつとめとして、どうしてもやらなければならない仕事だったのだ。『原爆詩一八一人集』出版記念記念会のスピーチで大阪の詩人下村和子さんが、日本に原爆が落とされたことは、ある意味で日本人全員が被爆者でもあるといい、だから自分は原爆詩を書いてきたと、日本の詩人としては重要な共通するテーマだと語られたことは、多くの原爆詩を書く詩人の精神を代表する名言だと私の心に刻まれている。そのような言葉を実際に生きているのが中原澄子さんなのだ。中原さんは長

家庭にいた児童五十余名だったという。しかし生き残った荒木教頭は、生き残った生徒を集め十一月には学校を再開したと資料には記されている。中原さんの詩「走るかっこうで炭になつて 立つとつとですよ」に城山小学校付近の次のような箇所があることを思い出していた。

わたしや もうほんと ひどかつば見たつてすばい

橋ん上でああた こがんこまか子供がなあ

二、三歳ぐらいじゃつたと思つと

城山小学校から 松山ん方に行く浦上川にかかつとる橋

梁橋

これが一番私やびつくりしたつ ギョツ としたつ

ゾクツとしたつ

ちようどもう 豚んごと ふくれて

遊びに行きよつたつか どがんしよつたつ か

こまんか子の たつたひとりであ

当時、この梁橋はこのようなこの世のものとは思えない情景を生き残つた被爆者たちの心に刻ませていたのだ。この後に松尾俊彦さんは電車の中から外へ七、八人が逃げる格好をして真つ黒に炭になっているのを目撃するのだ。そのような被爆者たちが遭遇した場所を意識しながら、城山小学校の被爆校舎に中原さんが入つて行つた。教職員が親しげに話しかけ

崎原爆の爆心近くにいた人びとがその瞬間どのような体験をしたか、自分を含めて被爆者たちの肉声はどう語られたのか、そこに焦点を当てる。人間をこのような過酷な状況に陥れた大量虐殺である戦争犯罪の実相を明らかにするためには、被爆者に語らせる方法が一番いいのだと考えたのだろう。そのため中原さんが一番気を遣つたのは、被爆者や被爆団体との信頼関係の構築だつたとお聞きしている。

原稿がほぼできた後に私と中原さんは四月下旬に長崎に向かった。待ち合わせたその日の午後、JR長崎駅前で会い路面電車に乗り、爆心に向かった。原爆が投下された松山町で降りると、右に行けば平和公園に向かう階段があるが、中原さんは左手に流れる浦上川の方へ向かいタクシーに乗りとうとする。どこに行くのかと尋ねると被爆校舎が残っている城山小学校だと言つた。浦上川を見ながら、たぶんこの付近が焦熱地獄であつたらう梁橋を渡ると、直線で五百メートル足らずの距離なので、すぐに着いたが高台なので階段を上らずに迂回してタクシーが入れる急な坂を上つて小学校に入った。爆心から五〇〇mの高台付近では、当時千四百余名の生徒と職員が被爆したといわれる。また校内にいた三菱兵器製作所員五十八名、庁務員三名、挺身隊員十二名、学徒報国隊員四十二名が校内の作業所で働いていた。子供たちも遊びにきていただろう。生き残つたものは、先生二十八名のうち三名、三菱兵器製作所員九名、挺身隊員二名、学徒報国隊員四名、

できてくれたので、名刺を渡した。当時の生々しい被爆のあとが残る内部の痕跡を見学し怒りがこみ上げてきたが、亡くなった多くの子供たちを慰霊するこの地を訪れた全国の小学生たちの手紙や千羽鶴によつて救われた思いがした。階段を降りて教職員の方に感想を伝え、昨年コールサク社で刊行した『原爆詩一八一人集』日本語版・英語版の二冊を手渡して学校の図書館にと手渡した。するとその内容の価値を直観してくれたらしく、校長先生に会つてくださいと言われ、いつのまにか私と中原さんは校長室に連れて行かれたのだつた。資料によると城山小学校は、生き残つた荒木教頭がその年の十一月に数少ない生徒を集めて復興し、後に荒木校長となり学校を再建されたという。そんな歴史ある学校の校長先生に会うことは少し緊張したが、人を警戒させない気さくな女性の柘田忍校長先生だつた。初めて会つたような気がしない自然な気持ちで中原さんの詩集作りのために訪れたことを伝えた。また『原爆詩一八一人集』を子供たちの前で朗読などをして活用して欲しいとお願いをした。柘田校長先生は月に一回、平和教育の授業をしているので、その授業に活用したいと即座に希望を聞き入れてくれた。長崎に着いてからまだ数時間しかたつていないのに私は確かな手応えを感じたのだつた。一八一人の詩人たちの思いがこの最もひどい長崎原爆の悲劇の地の一つに届けられた思いがしたのだつた。中原さんの詩集が完成したら読んでいただきたいとお伝えしてその場

を後にした。松山町を見下ろすことのできる校庭のはずれには、学徒動員の一人で被爆死した長崎県立高等女学校四年生の林嘉代子のために両親が植えた七本の嘉代子桜がある。嘉代子は両親の執念で被爆校舎の壁の中から二十二日後の八月三十日に発見され、両親によって校庭で荼毘に付された。桜に平和を託した両親の心は絵本にもなり、大切に語り継がれている。私は明日もう一度この場所をゆっくりと訪れてみたいと思った。

午後遅くなったので原爆資料館は閉館してしまい明日にすることにした。浦上天主堂を見に行き、被爆した黒いマリア像などや落下した鐘撞き堂の残骸を見て、被爆の凄まじさを想像した。中原さんはその被爆跡を飽きることなく眺め続けていた。その凝視する眼差しは、長崎原爆の体験をどのように風化させないで残すかを深く思索しているのだと痛感した。夕暮れになって暗くなっても中原さんは私を被爆跡地に連れて行こうとする。当日の最後の場所は、長崎医大の爆風で傾き浮き上がった門だった。何トンもありそうな門が傾いているさまは、いかに爆風が凄まじかったものかを想像させる。夕暮れの門を眺めていると私は、小学校時代の担任の荒木昌巳先生の兄上がこの場所で被爆死していることを想起した。私が原爆のことを初めて知ったのは、小学校高学年のころ先生の言葉からだった。先生から最近いただいた永井隆著『長崎の鐘』には荒木先生の兄上のことも記されている。

近くのホテルから三十分ほどかけて路面電車の脇道を歩いて一人で城山小学校に行った。浦上川にかかる梁橋を今度は歩いて渡り、城山小学校の石垣で囲まれた高台の長い階段を上っていった。黒い石垣はその時の熱線・熱風が駆け上がった跡だろうか。その時、石垣に青色ではなく白花の露草を見かけた。石垣の隙間の少しの土埃に咲く露草は、朝の光に輝いていた。途中で学校を再建した荒木校長が亡くなった時にご遺族が寄贈したという荒木桜が青葉を茂らせていた。二人の荒木先生は多くの教え子を亡くし、兄や兄の友人たちを亡くした。二人の平和を祈る志を決して忘れてはならないと思いを新たにした。白花の露草と桜の若葉に決して忘れてはいけない被爆者の命を感じた。嘉代子桜の前で二人の少女が一輪車の練習をしていた。

中原澄子さんの詩集はきつと多くの長崎原爆の被爆者や関係者や長崎原爆を後世に残す人たちを勇氣付けるだろう。そしてこれを機に、長崎原爆の語られなかつた真実が語られることに繋がればと考える。中原さんの勇氣と実行力の詩篇は、長崎原爆の詩の歴史の中で光り輝きつづけるだろう。そして『長崎を最後にせんば』という中原澄子詩集が「ナガサキの哲学」となって、世界の核廃絶を願う心ある人びとに読み継がれていくことを心から願う。最後に中原さんが被爆した女生に語らせた詩を引用する。

先生はまず足もとの黒変した肉体に飛びついた「おい、おい」返事がない。両肩に両手をかけて引き起こそうとしたら、皮がべろりと水蜜桃のようにはげた。岡本君は死んでいた。その隣のが、「うーん」と呻いて反転した。「村山君、村山君、しっかりしろ」先生はべろべろに皮のはげた学生を膝に抱いた。「先生、ああ、先生」そういつたきり村山君がぐくつとなつた。「あーあつ」先生は深い溜息をつき、村山君の冷えてゆく裸身を土の上に横たえ、合掌して、次の荒木君の上にしやがんだ。荒木君は南瓜のようにぶくぶくに膨れ上がり、ところどころ皮のはげた顔の中に、細い白い眼をみひらいて、「先生、やられました」と静かにいった。「もう駄目らしいです。お世話になりました。」

（永井隆著『長崎の鐘』の「被爆直後の情景」より）

原子専攻の清水先生の学生たちを含む八百名以上が被爆死した。その学生達の中に、小学校時代の恩師の兄である荒木君は壮絶な最後を礼儀正しい言葉を吐いて亡くなっていた。私は長崎医大の門柱を八百人の墓標のように中原さんと手を合わせて冥福を祈った。私に原爆の悲惨さを子供のころにしっかりと伝えてくれた荒木先生がこの場所に私を連れてきてくれたのだと深く感謝した。

中原さんとは翌日も行動を共にしたが、私は早朝に長崎駅

今でん忘れられん

高等女学校ぐらいいん体格のよか女の子じゃった  
ひどか火傷ばしどらしたつ

わしん顔に向けて

「うらかみ ん いえに かえり たか……」て  
ふくれた口の そがん言（そんをじ）いよらすごたつた

（「うらかみ ん いえに かえり たか……」

——爆心から三・二キロ 飽くの浦 市川繁さん）